KCELS Newsletter No.20
MARCH 2005

第29回神戸女学院大学英文学会(KCELS)大会報告

鵜野　ひろ子

晩秋の穏やかな日差しの11月26日の午後、文学館28番教室において、第29回神戸女学院大学英文学会を開催いたしました。今回は、イギリス文学の泥谷征人先生と和気節子先生の担当で、特別講演には、奈良女子大学を定年でご退官後、現在広島女学院大学教授でおられます吉田幸子先生にお願いいたしました。

吉田幸子先生は特に英米詩の研究で有名でおられますが、ご著書には『サウスウェルとクラッショウ：ピューリタニズムとカトリシズムの美意識』、『ジョン・ダンの異端と正統』、『シルヴィア・プラスの世界』(共著)、『現代アメリカ女性作家の深層』(共著)、『イギリス女性作家の深層』(共著)等があり、多岐にわたるご研究を窺い知ることができます。今回は「スチュアート朝の仮面劇ーThomas CarewとMiltonを中心にー」という題のご講演で、専門的な内容でしたので学部生には難しかったと思われますが、学問の奥深さ、面白さを垣間見ることができたと思います。院生や研究者には大変刺激的で、多数の参加者から、「中身の濃い、充実した講演を拝聴した」といった感激の言葉が聞かれました。

せっかくのご講演をより大勢の方に聴いていただくため、今回初めて、大学院通訳コースの学生がご講演を、松縄順子先生の指導の下、日本語から英語に同時通訳させていただきました。前もって泥谷先生から仮面劇やミルトンについての講義を受けていましたので、質疑応答にも見事な通訳がなされ、参加者の賞賛を得ました。

研究発表の部では、本学大学院博士後期課程に在学中の花川麻実子さんが「パウンドの秘められた抵抗：エズラ・パウンドとシェイクスピア」という題で、パウンドのシェイクスピア観について、また本学を卒業し、本学大学院修士課程を修了後現在関西大学大学院博士後期課程在学中の川部和世さんが「英語の授業を変える：学習者中心の経験学習で内発的動機付けを高める考察」という題で発表されました。どちらも独創性に富み、真摯な研究態度が窺えました。

このように充実した午後を共にすることができましたこと、吉田幸子先生をはじめ、参加していただきました皆様に深く感謝申し上げます。

Royalist と Puritan の仮面劇
― Thomas Carew と John Milton の場合 ―

吉　田　幸　子

トマス・ケアリー (Thomas Carew, 1598-1648) の『ブリタニアの天』(*Coelum Britanicum : A Masque at White-Hall In the Banqueting-House, on Shrove-Tuesday-Night, the 18. of February, 1633*)が1634年にロンドンで上演され、その同じ年の９月に、ミルトン (John Milton, 1607-64) の仮面劇、『コーマス』(*A masque presented at Ludlow Castle*)(出版は1637年)がイングランドとウェールズの境域のラドゥロー城で上演された。この両作品の相似性と相違性を比較し、両著者が作品に託した主旨を考える。

Ⅰ．トマス・ケアリーの『ブリタニアの天』

『ブリタニアの天』の主題はブルーノ (Giordano Bruno, 1548－1600) の『奢れる獣の追放』(*Lo*

Spaccio de la Bestia Triumphant, 1584. 英語訳 *The Expulsion of the Triumphant Beast* は1700年)を原型に用いて、天界から悪を追放するというもので、ジュピターはその悪の浄化を、チャールズ一世の地上の統治をその模範として、悪徳を追放するという語りの枠組みを用いる。この点ではケアリーの『ブリタニアの天』も君主制の称揚であるが、この作品が他の宮廷仮面劇と異なる点は、混沌と無秩序の現実の世界がアンティマスク(anti-masque)において、大規模に展開されることであり、その悪の諸相はとりもなおさず現実の政治体制の諷刺となっている。この追従と諷刺のやりとりは『奢れる獣の追放』に登場する神の使者マーキュリー(Mercury)と天から追放されたモゥマス(Momus)とで演じられる。

つまり善と悪が相対化されて、場面は展開する。しかしながら究極には『ブリタニアの天』はチャールズ一世の宮廷は美と愛が治める理想世界であるとして、君主制の価値を擁護する。この点において『ブリタニアの天』は宮廷文化擁護である。

II. ミルトンの『ラドゥロウ城の仮面劇』

ミルトンのラドゥロウ城で1634年9月29日に上演された『仮面劇』(通称『コーマス』、以下『コーマス』と記す)はブリッジウオーター伯爵が1631年、ウェールズとその境界地域総督(President of Wales and Marches)に任命されて、ラドゥロウ城の主君となり、1634年9月、正式に着任した機会を祝うために上演された仮面劇である。

作品は表題の仮面劇の形式を踏まえ、まず悪の世界を表出するアンティマスクでは、コーマスが荒野で「乙女」を騙し、彼の宮廷で誘惑しようとするが、そこにふたりの弟が突入しコーマスらは追放される。しかしコーマスが乙女にかけた魔術をとくためにセヴァン川の妖精のサブライナが喚ばれる。最後にラドゥロウ城の両親に三人の子供たちが再会する。ミルトンのコーマス像はバッカスとキルケーとコーマス三者の複合像、すなわち、三者の悪を集約した像であり、善と悪の対照が際立たせられ、その表象の道具もバッカスの酒盃、キルケーの魔法の杖、そして半人半獣の部下たちである。

『コーマス』と一般の宮廷仮面劇を比較して論じる批評は、ピューリタンと宮廷派という両者の相違性に重点をおくノーブルック(David Norbrook)やルウォルスキー(Barbara Lewalski)と、ジャンルの共通性に重点をおくケリガン(John Kerrigan)にわかれるが、ブラウン(Cedric Brown)はその相違を以下のように整理する。上演場所は『コーマス』はロンドンの国王夫妻の宮廷ではなく、総督夫妻の居城であるウェールズのラドゥロウ城である。舞台装置はイニゴ・ジョーンズ(Inigo Jones)による大掛かりな機械による装置ではなく、ラドゥロウ城の城郭をそのまま用い、人物の登場、退場も天上から舞台へというのではなく、舞台上を徒歩か疾走して行う。サブライナだけは凱旋車で舞台下から登場する。舞踏をする人の人数も少ない。ただし重要な相違はミルトンが作品の主題をピューリタンが重視した美徳の貞節としたことにある。しかしながら、王党派の仮面劇とピューリタンの仮面劇が同年に上演されたという事実は、当時の文化風土の広汎性と許容性を示すといえよう。

パウンドの秘められた抵抗：エズラ・パウンドとシェイクスピア

花川　麻実子
神戸女学院大学大学院博士課程

20世紀の詩人エズラ・パウンドはシェイクスピアを若い頃から意識し続けてきた人物であった。1939年にRonald Duncan氏にあてた手紙の中で、彼はシェイクスピアに対して“Hunks of Shxpr [Shakespeare] *bore* me; I just can't read 'em.”(324)と自らの考えを率直な言葉で綴っている。この一節には、パウンドのシェイクスピアに対する姿勢が端的に現れているが、手紙を書いた当時パウンドがすでに50代半ばであった事を考えると、このようなシェイクスピアに対しての否定的な捉え方は長年の詩人生活から具体的な経験の積み重ねを通して徐々に構築されていったと考えられる。実際、パウンドが学生時代にシェイクスピアの講義に興味を示さなかったという話を、ペンシルバニア大学時代からの友人であるWilliam Carlos Williamsは披露している。彼が抱くシェイクスピアに対しての反発的な考えは、*A Lume Spento* (1908)の中の“The Cry of the Eyes”にも影響を与えている。この詩には、シェイクスピア作品を高く評価しようとしない自尊心の高い若きパウンド像が映し出されるとともに、彼が密かに抱いていたシェイクスピアへの秘められた抵抗が読み取れる。しかしながら、一方で彼はシェイクスピアを心の

底から敬愛もしていたようである。パウンドはDanteなどと並べてシェイクスピアを“my more congenial ancestry”であると密かに慕っていたことを打ち明けている。このように心の中で慕いながらも、同時に反抗的な一面も見せるという相反する感情は、パウンドがシェイクスピアに対して揺れ動く複雑な感情を持っていたということを示しており、シェイクスピアがいかにパウンドに影響を与え続けていたかを物語っている。

質的研究―英語の授業を変える Informational Learning:学習者中心の経験学習で内発的動機付けを高める考察

Informational Learning: Enhancing intrinsic motivation in student-centered teaching with experiential learning

川　部　和　世
関西大学大学院

この質的研究は、2003年度の川部の学習者の内発的動機を引き出すwriting指導法の質的研究発表の結果を考慮して行った継続研究である。今回は、大学１年生、３年生、中学３年生を主な対象とし、新しい視点で授業を変える指導法Informational Approach：学生と教師間のcommunicationやinteraction、feedback考慮した学習者中心の授業で学生の認知的発達を促し、内発的動機付けを高める指導法(Kawabe, 2004)を考察した。前回の研究の理論的枠組みであった、Deci & Ryanの「自己決定理論」とWilliams & Burdenの“a social interactionist model”を根底に学習者中心指導student-centered teaching with experiential learning(Kolb)を実践理論枠として考慮した結果、自発的な学習によって認知的発達を英語学習で経験した学生は、内発的動機が高められるというresearch questionをたて、それを質的研究で考察する試みであった。その結果、教師、学生間のinteractionを通して構築された両者の信頼の人間関係と、授業を通じて学生が自ら気づいたMeaningful informationが、効果的に学生の内発的動機を促進している事が明らかになった。指導法は、student-centered teaching with experiential learningであった。その根底に現れたのが、学生の学習への認知的発達であり、これはまさに認知心理学理論が教育の現場で生かされている実証である。文部科学省が唱える新教育課程では、「自ら学び考える力の育成」が掲げられているが、教育の目的が知識獲得偏重から自発的学習、思考力育成へと変化してきており、学習者が自ら能動的に学習過程をメタ認知し、理解し、学習の転移を生じて創造することが広い意味での真の教育となってきた。動機付けの低い英語学習者の増加をなげく昨今であるが、この研究の結果が授業実践の場で英語の授業を変えていくひとつの提案になる事が出来ればと願っている。

キャンパスニュース

＊Janice H. Harris客員教授は、1年間の任期を終えられ、本年3月にアメリカへ帰国されます。

＊Kerstan B. Cohen専任講師は、本年3月末に4年間の任期を終えられます。

＊Margaret C. Kim氏は、Cohen氏後任の専任講師として、本年4月に就任されます。

＜2005年4月より就任＞

小林淑子特任教授　新任

泉川泰博助教授　新任

＜所属変更＞

奥本京子氏　2004年4月より、大阪女学院大学国際・英語学部所属　助教授（短大から変更）

＜訃報＞

元KCELS会員 朝日千尺氏(E72、GE85)が2004年7月15日享年72歳でご逝去されました。朝日先生は、元本学理事、評議員、元本学非常勤講師でいらっしゃいました。天上の平安をお祈り申し上げます。

元KCELS会員 太田洋子氏(E83、GE86)が2004年6月11日享年60歳でご逝去されました。太田先生は、元本学非常勤講師でいらっしゃいました。天上の平安をお祈り申し上げます。

国際学会発表

＊平井雅子氏

英国、Cambridge大学Clare Hallで開催されたJAPAN WEEK(2004年5月21日-28日)で講演。

＊保坂華子氏

同志社大学で開催されたThe 31st International Systemic Functional Congress (2004年8月30日-9月4日)にて研究発表。

アメリカ、シェラトン ワイキキ ホテルで開催されたThe 3rd Annual Hawaii International Conference on Education (2005年1月4日-7日)にて、研究発表。

＊石川（中尾）有香氏

韓国、Academy of Korean Studiesで開催されたEnglish Language and Literature Association of Korea International Conference in Commemoration of the 50th Anniversary (2004年6月15日-18日)にて招待研究発表。

韓国、Seoul Olympic Parktelで開催されたAsia TEFL International Conference (2004年11月5日-7日)にて研究発表。

＊栗栖和孝氏

アメリカ、アリゾナ大学で開催されたJapanese / Korean Linguistics Conference 14 (2004年11月5日-7日)にて研究発表。

＊三宅伸枝氏

アイルランド、Galway大学で開催された国際アイルランド文学会（IASIL　2004年7月20日-24日）にて研究発表。

＊奥本京子氏

ハンガリー、ショプロン　ホテル・シエスタで開催されたInternational Peace Research Association(2004年7月5日-9日)にて研究発表。

＊Seton, Cyndee氏

ロシア、Far Eastern National Universityで開催されたFar Eastern English Language Teachers' Association(2004年6月24日-27日)にて研究発表。

＊立石浩一氏

アメリカ、Mariott Oakland City Center および The Oakland Convention Center で開催された The Linguistic Society of America 2005 Annual Meeting(2005年1月6日-9日)にて研究発表。

＊吉田純子氏

ブルガリア、Provdiv大学で開催されたInternational Research Society for Children's Literature (2004年5月12日-17日)にて研究発表。

神戸女学院大学で開催(予定)のInternational Research Society for Children's Literature (2005年3月31日)にて研究発表。

大学院生による学会発表

＊高木範子氏

広島大学で開催された日韓美学研究会（2004年8月6日-11日）にて研究発表。

記念賞

2004年度、以下の英文学科学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

大沢幸恵記念賞　E02159　山本 麻菜

デフォレスト記念賞　E02017　福田 真里

会員による出版紹介

◇別府恵子氏　『ヘンリー・ジェイムズと華麗な仲間(ペッドフェローズ)たち：ジェイムズの創作世界』(編著　英宝社　2004年10月刊)

◇風呂本惇子氏　『カリブの風－英語文学とその周辺』(編著、鷹書房弓プレス　2004年10月刊)

『英米文学のリヴァーブー境界を越える意志』(共著　開文社出版　2004年7月刊)

◇橋本登代子氏　『表象と生のはざまで』(共著　南雲堂　2004年8月刊)

◇東森勲氏　『プラクティカルジーニアス英和辞典』(編集主幹　大修館　2004年11月刊)

◇栗栖和孝氏　『音韻理論ハンドブック』(共著　英宝社　2005年1月刊)

◇長尾ひろみ氏　『司法通訳』(共著　松柏社　2004年4月刊)

◇立石浩一氏　『音韻理論ハンドブック』(共著　英宝社　2005年1月刊)

◇山田由美子氏　『第三帝国のR. シュトラウス－音楽家の＜喜劇的＞闘争』(単著　世界思想社　2004年4月刊)

Shakespeare and the Mediterranean (共著　U of Delaware P, 2004年)

◇吉田純子氏　『身体で読むファンタジー－フランケンシュタインからもののけ姫まで』(編著　人文書院　2004年12月刊)

神戸女学院大学英文学会 会則

（1995年４月１日施行）

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修了生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修了生有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英文学会を開催する。

Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。

その他。

(5) (a)上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b)運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

(1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。

(2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。

(3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。

(4) (3)に関しては、ＫＣＥＬＳ専用の口座を利用する。

編　集　後　記

平成14年度に英文学科で始めた通訳養成プログラムを、全学部学科生に開講し発展させていこうとする試みが評価され、平成16年度の文科省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選ばれました。本学ならではの英語教育を常に前向きに追求しております。

多くの方々のご協力を得まして、今年もNewsletterを発行することができました。お礼申し上げます。

*KCELS Newsletter*編集委員

（2004年度運営委員）

◇泥谷征人　◇P. Maeker　◇鵜野ひろ子　◇和気節子

（ABC順）

KCELS Newsletter No. 20

編集発行　神戸女学院大学英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

http://www.kobe-c.ac.jp/english/kcels.html

2005年３月発行